

福島第1原子力発電所事故の影響で特に心配されたのは、食べ物などから体内に入った放射性物質がおおす内部被曝(ひばく)だ。旧ソ連のチェルノブイリ原発事故から



推定された放射線量は5μSv。ツイッターの情報発信で知り合った医師などと協力して、現地で調査に取り組んだ。内部被曝の調査に学校給食の放射線量を測るのがよいと考え、文部科学省に提案しました

福島不安 科学で対峙 ④

当初は採用されませんでした。実現しようとしてツイッターでも発信しているときに、現地で働く医師の坪倉正治さんや宮崎真さんなど医療の専門家とつながりができたことが、福島に頻りに通うようになったきっかけです。

南相馬市立総合病院に配備された内部被曝を調べるホールボ



内部被曝を調べるホールボディーカウンターの前で南相馬市立総合病院の人たちと(前列右から2人目が本人)

医師と内部被曝を調査

急いで論文「心配ない」

ディーカウンター(WBC)という装置のデータ解析を助言したのですが、装置に入っていないときの方が放射線量が高くてデータがおかしい。他のグル

ープの調査でもあまりに高い測定値が出ており、チェックさせてもらったところ最初の設定が誤っていたこともありました。従来のWBCは放射線の影響

を受けやすい赤ちゃんの測定ができないため、赤ちゃんを測定できる「ベビー स्कаны」も開発しました。「お母さんを測って大丈夫なら、科学的に大丈夫ですよ」というのも納得されない。実際に測定しないと安心できなかったのです。

2013年春に内部被曝についての論文を発表した。ひらた中央病院(福島県平田村)で検査した約3万人のデータをもとに分析した放射線量は1.5μSv以下。推定よりずっと少なく、健康への影響が心配ないことを示した。

これが、福島に関して書いた初めての論文でした。実際のデータに基づいて、福島の実況がそれほど悪くないことを示す論文だと思われています。

はないかと思っています。3月末、東大を退官する。15日に開いた最終講義の演題は「CERNと20年 福島と6年」。会場の小柴ホールは物理の専門家から福島との関係者まで幅広い聴講者であふれた。

福島との関わりのおかげで将来に向けて力を入れてきたのは、県立福島高校の生徒との取り組みです。福島第1原発事故の影響について生徒らが調査研究をまとめ、14年3月にスイスのジュネーブで開かれた高校生たちのワークショップで発表。1月にテレビ会議で九州の高校生たちと交流した直後にワークショップの開催がわかり、その場で参加を決めました。3人の高校生を連れて行きまし

文がなく、ぜひ必要だと思いましたが。正月休み中に急いで論文を書き上げました。急いだのは、放射線被曝とその影響について、国連科学委員会の報告書の元データとなるように間に合わせたかったからです。14年にまとまった報告書では「今後のがん統計に、事故に伴う放射線被曝に起因する有意な変化が生じると予想していない」と記載されました。福島県伊達市からデータの提供を受けてまとめた論文では、住民が一生を通じて浴びる放射線量は70μSv以下でした。私は00年に肺がんの手術をし、CTの検査などで浴びた放射線は約200μSvになりましたが、これまでに影響は出ていません。事実に基づいて「安全です」と言っておあげられる。それが大切なことだと思われています。

だが、みな英語で堂々と発表して質問にも答え、手助けする必要がありました。昨年は福島第1原発も訪問しました。高校生を連れて行くことに批判もありましたが、現場を見て一次情報に触れて考えるようになってほしかった。

福島での活動は、国などの資金に頼らず、金銭的に独立できたことが大きかった。ツイッターを見ていた人たちが寄付を集めるようになり、東大のホームページで寄付金を募集するコーナーに、私宛てのパナーが設けられました。内部被曝の調査や論文の掲載、福島の高校生を欧州に連れて行く費用などはすべて寄付で賄いました。私の社会とのつながりを見いだしたのだと思えます。

(シニア・エディター 小玉祥司が担当しました)



昨年8月、才能教育研究会(長野県松本市)の第5代会長に就任した。スズキ・メノードとして知られる独特の音楽教育で著名な演奏家を数多く輩出している。

福島不安 科学で対峙 ⑤

引き受けました。才能教育研究会も設立から70年たつて、うまくいっているところも悩んできているところもあります。まず、教室の先生方の話を聞くことと全国を回っています。これまでに30回以上の懇談会で、全体の8割に当たる約600人の先生にお会いしまし



震災前から一日も欠かさず、ツイッターに写真を投稿している

地元の高校生と交流も

多様な活動へ理解 寄付増

た。話を聞いて考えをまとめ、意識を共有してきました。福島の経験から学んだやり方です。4月には研究会として初めて外部評価委員会も開きます。今年から東京大学で脳科学を

研究している酒井邦嘉教授と才能教育研究会で、音楽教育の共同研究を始めます。幼児教育や・メノードの科学的背景を語ることもできるようになったので

で来たのは、県立福島高校の生徒との取り組みです。福島第1原発事故の影響について生徒らが調査研究をまとめ、14年3月にスイスのジュネーブで開かれた高校生たちのワークショップで発表。1月にテレビ会議で九州の高校生たちと交流した直後にワークショップの開催がわかり、その場で参加を決めました。3人の高校生を連れて行きまし

たが、みな英語で堂々と発表して質問にも答え、手助けする必要がありました。昨年は福島第1原発も訪問しました。高校生を連れて行くことに批判もありましたが、現場を見て一次情報に触れて考えるようになってほしかった。

福島での活動は、国などの資金に頼らず、金銭的に独立できたことが大きかった。ツイッターを見ていた人たちが寄付を集めるようになり、東大のホームページで寄付金を募集するコーナーに、私宛てのパナーが設けられました。内部被曝の調査や論文の掲載、福島の高校生を欧州に連れて行く費用などはすべて寄付で賄いました。私の社会とのつながりを見いだしたのだと思えます。

(シニア・エディター 小玉祥司が担当しました)

2013年に松本市で開かれたスズキ・メノードの世界大会で基調講演をしました。その後、会長にという話があり逃げ回っていたのですが、定年も近づき、子供のころに鈴木鎮一先生から受けた恩をお返しするつもりで